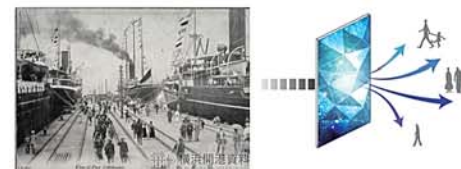




1. 映像技術が映し出す観光都市横浜の未来



開港から150年、歴史を積み重ねながらも常に新しいものを取り入れ文化へと融合することで人々を魅了してきた街、横浜。私たちはそんな横浜に、最新の映像技術を用い、映像を媒体として横浜の魅力を可視化、発信する拠点としての建築を提案します。観光コンテンツとしての映像を生み出すだけでなく、様々な映像技術を用いた新しい方法で観光情報発信を行い、訪れる人々に向け横浜の魅力を増幅して映し出す、万華鏡のような建築の提案です。

3. 時間や使われ方によって表情を変えるファサード



山下公園とその先の海に向け大きく開けた敷地の特性を活かし、山下公園側に内外の様子によって表情が変化するファサードを提案します。

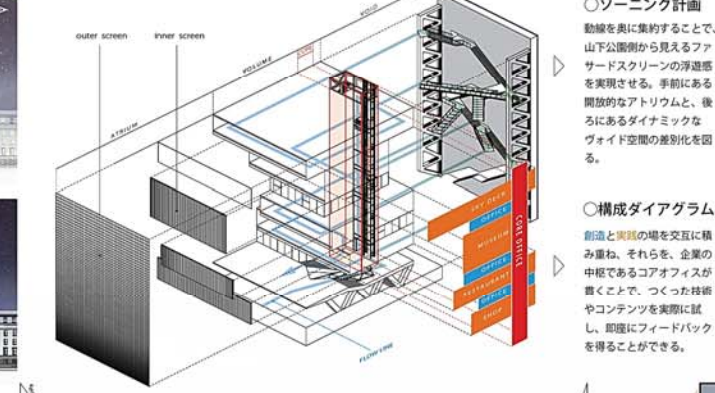
NOON ランダムにピクセル化された風に向け第一のスクリーンが空、海、そして山下公園の様を映像的に映し出す。
TWILIGHT 辺りが暗くなるにつれガラス裏のオフィスの光が向へと流れ出し、また第二のスクリーン内部のさまざまな映像の光が徐々にしみ出してくる。
NIGHT オフィスが点灯し、第二のスクリーン内部のカラフルな光が暗がりの中に浮かび上がる。
EVENT 第一のスクリーンにはプロジェクションを映し出す透過性のフィルムが貼られ、ファサード全体を大きな映像面とすることができ、映画館のスクリーンとして用いられ、山下公園全体が映画館の客席となる。

2. 創造と実践のインタラクションが映像技術を進歩させる



横浜市によって誘致された最先端の映像技術を研究する企業がこの建築を運営する。「オフィス=創造の場」に「実践の場=一般に開かれた空間」を組み合わせることで、創造と実践のインタラクションが映像技術を進歩させる。「創造の場」では、企業が研究開発を行うほか、映像を扱うアーティストや学生が、この企業と協働して先進的な作品づくりを行うことができ、「実践の場」では、この建築に訪れた人々に対してそれらを発信することが可能である。ここで生み出された映像技術・コンテンツは建築内に留まらず街全体へと広がり、横浜の潜在的な魅力が映像によって可視化・増幅されていく。

4. 前後上下に重なる空間構成



5. 内外の風景を映像化する二つのスクリーン

